

東京大学

理学部広報

第4巻第3号 昭和47年4月10日

3月理学部会合日誌

- 3月 1日(水) 人事委員会 (11:00~12:00), 臨時教授会 (2:00~4:30), 主任会議 (4:30~6:00)
- 11日(土) 会計委員会 (10:00~1:00)
- 13日(月) 理学系研究科委員会 (2:00~5:00)
- 15日(水) 教授会 (2:00~6:00)
- 21日(火) 総合計画委員会 (10:00~12:00)
- 22日(水) 主任会議 (3:00~4:30)
- 29日(水) 人事委員会 (10:00~1:00), 学位記授与 (11:00~12:00)
- 31日(金) 卒業証書授与 (各教室毎)

教授会メモ

3月15日(水) 定例教授会
於4号館物理会議室

1. 前回議事承認
2. 人事移動等報告
3. 研究生入学ならびに期間延長
4. 卒業生決定の取り扱いについて
5. 学内情報
 - 教養学部のスライキは継続している。進学の見込みも立っていない。
 - 総長特別補佐に大内教授(経), 中央図書館長に物理の今井教授が就任された。
6. 人事委員会報告 (今井委員長)
3月1日に開かれた委員会の報告
7. 教務委員会報告

理学部教務委員会のこれからの検討予定事項および一般教育における自然科学系列の科目の単位について飯田委員長および吉川教授からそれぞれ説明。

8. 会計委員会報告 (島内委員長)
昭和47年度設備充実費 (別項参照) について説明。部長保留金の残額は明年度に繰越すとの報告
9. 寄附申込について
10. 臨海実験所長選出
投票の結果動物学教室推薦の小林教授が選出された
11. 新委員 (学部長指名) 別表参照
12. 人事・会計委員改選
投票の結果田村 および 吉田(耕)両教授が人事委員に, 田丸, 古谷, および福島教授が会計委員に, それぞれ選出された。
13. 幹事会報告 (大木幹事長)
 - 入学試験が無事終了した。
 - 幹事会に植村教授が加わる。
 - 改革について理学部の雰囲気を経長室に伝えた。
なお, 山口教授が植村教授の後任として全学改革委員に選出された。
14. 大学改革
改革について自由討論がされ, 種々意見が述べられた。
15. NMR について
藤原教授から全学利用 NMR 分光計 (100 MHz, および 60 MHz) の利用状況 (昭42~47) について報告があった。
本年定年退官される宮本, 木下, 鈴木, 高井四教授に対して学部長から感謝のことばが述べられた。また, 四教授の御挨拶があった。

教室主任 47. 4. 1 現在

数 学	古 屋	教 授
物 理	西 島	"
天 文	末 元	"
地 球	岸 保	"
化 学	島 内	"
生 化	野 田	"
動 物	寺 山	"
植 物	下 郡 山	"
人 類	渡 辺	"
地 質	立 見	"
鉱 物	正 田	"
地 理	吉 川	"

施設 の 長

臨 海 小 林 教 授
植 物 園 門 司 教 授
地球物理研究施設 永 田 教 授
情報科学研究施設 高 橋 (秀) 教 授

委 員 表

委員会名	委 員 名
人 事 委 員	田村, 吉田(耕), 今井, 斎藤, 江上
会 計 委 員	田丸, 古谷, 福島, 伊藤, 霜田, 立見
業 務 委 員	飯田, 小松, 岸保, 高橋(武), 代谷, 吉川
総合計画委員	小平, 大木, 植村, 河田, 山口, 海野, 野田, 寺山, 古谷, 小堀
幹 事	大木, 藤田, 佐々木(亘), 黒田, 寺山, 植村
学 生 委 員	(全学) 岩本, (理) 宮沢, 永田(豊), 露木, 藤井
教 職 課 程	竹内(均)
臨 カ リ	高橋(武)
教 養 連 絡	木原
学 生 相 談 所	中村(誠)
学 寮 委 員	駒嶺
図 書 行 政	藤田
学 生 保 健	中村(誠)
保 健 セ ン タ ー	浅田
奨 学 委 員	宮沢, 正田

理, 広 報	塩田
全 学 広 報	福島
ア ル バ イ ト	佐藤(久)
外 国 人 学 生	永田(武)
資 料 室	山本(祐)
山 上 会 議 所	小柴

昭和47年度設備充実費等予算増額要求事項表

教室等	事 項
化 学	信号積算装置(横河ヒュレットパッカー社)
天 文	20 cm シーロスタット(三鷹光器)
地 物	高感度回転式磁力計(米シヨンステッド社)
鉱 物	回転対陰極大容量強力X線発生装置(理学電機)
物 理	電子顕微鏡(日本電子, JEM-100 U型)
臨 海	排水浄化装置

昭和47年3月31日卒業生氏名

数 学 科 (40名)

笠羽 晴夫	柴崎 康夫	長岡 亮介
伊藤 達郎	川原 洋人	北館陽太郎
雫石 明	島内 芳郎	長岡 省悟
橋爪 光教	船本 明良	丸山 忠誼
山里 真	吉田 和夫	若林 徳映
池庄司英臣	青木 邁	赤堀 厚子
荒井 大介	飯田 啓三	石井 一平
織田 孝幸	大橋 敏男	太田 雅巳
加藤 彰	海瀬 哲夫	桂 利行
立松 達朗	等々力正夫	中村 如
花田 孝郎	藤田 隆夫	満淵 俊樹
前原 和寿	水谷 一	宮岡 洋一
矢口 彰	山根 喜男	米谷 悟
岡村 明人		

物 理 学 科 (51名)

佐々木俊一	杉森 覚	竹内 謙介
藤原 公昭	馬越 健次	前田雄一郎
松田 准一	守谷 健	吉田 和夫
吉田 公義	和田 誠	浅井 吉蔵
麻多 進	天川 博隆	猪川 元興
石倉 誠	宇川 彰	小蒲 哲夫
小川 和男	小野 義正	太田 賀文
岡村 昇一	狩野 覚	倉本 義夫
佐藤 幸三	佐藤 傑	佐藤 信夫

佐野 理	須藤 滋	菅野 克仁
杉 正人	田中 充	高河原俊秀
高木 英明	武田 広	椿 栄一
戸山 正	中川 明夫	中村 研一
西尾 泉	西村 英俊	広瀬 宣郎
布施 元正	福田 共和	舛本 泰章
宮下 保司	本林 透	吉岡大二郎
和田 純夫	和田 博夫	若松 正志

天 文 学 科 (5名)

小杉 健郎	井上 一	家 正則
永井 福郎	吉川 正洋	

地 球 物 理 学 科 (21名)

木村 恵一	百瀬 晴行	市橋 正生
宇田川雄司	尾野 精一	大内 徹
唐戸俊一郎	熊井 基	近藤 豊
渋谷 和雄	上嶋 正人	杉浦 直治
中村 健治	中村 一	古田 治
水谷 滋樹	宮下 芳	山本 隆
吉岡 直人	吉田 徳久	渡辺 秀文

化 学 科 (42名)

鵜木 昌博	佐藤 敏近	野崎 一洋
林 衣	古郡 悦子	村上 修
井本 英夫	石塚 博昭	岩田 錬
植弘 崇嗣	大川 忠	岡部 秀子
落海 雅英	木下 修一	菊地 康
熊谷 潤一	倉 剛進	倉橋 久夫
小出 和伸	五味 英行	猿渡 雄彦
坂田 興	新谷 英樹	高橋 泰
竹下 宗一	立川 登	橘 和夫
西川 俊広	奴間 伸茂	浜田 秀昭
藤川 高志	村上 雅茂	森永 伝
安田 顕	山村 和子	横田 克行
新保外志夫	末広 牧子	鈴井 恵子
鈴木 薫	関口 和夫	田中 進

生 物 化 学 科 (18名)

才野 敏郎	玉野井冬彦	平川 康人
山口 明人	井辺 和子	大島 治之
岡崎 豊	掛川みどり	金井 文昭
国分由紀子	斎藤 春雄	清水 隆
長田 重一	西垣 功一	村上 和久
望月順一郎	大和 正幸	山登 一郎

生物学科 (動物学) (7名)

岡村 直道	菊田 彰夫	小室 正人
西駕 秀俊	高井 哲史	野沢 昭典
野中 勝		

生物学科 (植物学) (7名)

鴨脚 建夫	佐藤 昇	川崎 信二
塩沢いづみ	鈴木 孝仁	箸本 春樹
丸田恵美子		

生物学科 (人類学) (4名)

石崎 寛治	三谷 茂	矢追 敬造
山形 謙二		

地 学 科 (地質学鉱物学) (15名)

菊島 一郎	地井 三郎	徳山 英一
青木 正博	秋山 義夫	井上 正澄
狩野 謙一	北村 健二	小宮 学
河野 愛	服部 恵子	原 衛
福田 隆志	松本 良	水野 峰男

地 学 科 (地理学) (4名)

小野寺三朗	佐藤 健	諏訪 哲郎
望月 誠		

昭和47年3月29日
大学院修士課程修了者氏名

理学系研究科

数 学 専 門 課 程 (27名)

赤尾 和男	安野 東生	池沢 芳夫
大槻 真	岡 陸雄	岡本 和夫
奥津 杲作	木下 道夫	黒川 彰
小池 正夫	五味 健作	三辺ユリ子
筱田 健一	庄司 俊明	田中 隆一
田村 英男	中村 郁	永瀬 輝男
西森 敏之	野澤 宗平	疋田 輝雄
堀川 穎二	前田 幸久	水谷 明
柳田 伸顕	山崎 正	吉澤 尚嗣

物理学専門課程 (46名)

伊尾木公裕	石原 平吾	板野 明史
今里 純	潮 秀樹	歌峯 秀史
江口 徹	榎本 正人	大山 純一
金子 正彦	金久 実	小出 昭夫

古森 雄一	後藤 修	越野 長明
佐藤康太郎	佐々 政孝	杉村 陽
鈴木 順三	高橋 利宏	高原 武
高山 勝	年岡 晃一	中村 勝弘
夏目 雄平	成原 一途	野口 修一
橋本 治	浜崎 正治	伏見 諭
万代 敏夫	稗田 康夫	福来 正孝
藤田 丈久	古井 貞隆	星野 享
松井 誠	松浦 俊彦	松尾 和洋
松本 信雄	三間光太郎	村中 昇
山本 一	横谷 馨	吉田 猷
吉原 直武		

天文学専門課程 (8名)

小倉 勝男	岡崎 彰	栗原 正博
高田 昌英	中村 士	藤本 真克
真鍋 盛二	UUONG. QUOC. DINH	

地球物理学専門課程 (15名)

伊藤 純一	大迫 正弘	大西 檐平
菊地 正幸	佐川 永一	四竈 信行
千葉 文子	都司 嘉宣	長山 直弘
西澤 修	浜田 信生	巻田 和男
益永 典昭	松村 正三	吉岡 修

化学専門課程 (40名)

青山 智夫	天野 力	伊東 宏
伊藤 豊	稲垣 冬彦	今橋 勇三
小澤 宏	柿本 政雄	春日井由利
金本 博昭	唐木田健一	河村 隆幸
黒田 玲子	児玉 俊子	佐野 芳徳
酒井 拓彦	柴田 猛順	鈴木 孝
鈴木 文夫	関 一彦	田中 清明
田中 桂一	館江 栃郎	徳江 郁雄
中島 真幸	野津 憲治	浜口 宏夫
原 洋二	春川 順市	久岡 基志
平野 克己	平林 保治	広田 洋
広田 道夫	富宅喜代一	藤津 博
正井 成一	水上浩一郎	森尾 和彦
山下 光男		

生物化学専門課程 (15名)

四宮 象二	田村 立夫	富田 幹夫
星野 稔	溝部 文夫	室伏 拡
山本 正幸	井口 義夫	岩下新太郎
小笠原直毅	岡部敬一郎	河村富士夫
黒沢 良和	黒田 正明	小林 孝彰

動物学専門課程 (8名)

市川 友行	加藤 洋一	木村 博
久保田順子	末光 隆志	菅原 隆
常木和日子	南部 滋郎	

植物学専門課程 (6名)

市村 浩	小川 潔	鈴木 隆
鈴木 正彦	新村 幸雄	山崎 史織

人類学専門課程 (6名)

煎本 孝	加納 敏光	小池 裕子
平井 直樹	三沢 光子	四元 伸子

地質学専門課程 (7名)

石井 輝秋	大塚 謙一	神尾 重雄
土井 貞徳	藤井 敏嗣	柳本 裕
山口 寿之		

鉱物学専門課程 (2名)

今西 康弘	工藤 康弘
-------	-------

地理学専門課程 (3名)

大谷 猛夫	萩原美智子	山口不二雄
-------	-------	-------

相關理化学専門課程 (20名)

安部 真一	東 実	石川 盛士
岡本 彰夫	片桐 千仞	久保寺憲一
児島 邦公	児玉 広之	志甫 諒
田中 正継	高松 久雄	西田 英男
長谷川明郎	氷上 忍	福島 久雄
町田 光信	三井 皎生	宮原 恒昱
本村 修二	吉田 宣俊	

科学史・科学基礎論専門課程 (3名)

中川 徹	松尾 幸季	吉仲 正和
------	-------	-------

理学博士学位授与者

昭和47年3月13日授与者

専門課程	氏名	論文題目
物理学	五十嵐 正 敬	Strong Meson Dominance Model and the second Kind Currents in the Strangeness-Conserving Semi-Leptonic Weak Processes. (弱い相互作用の中間子模型による解析と第二種の相互作用)
物理学	戸塚 洋 二	A Systematic Investigation of Muon Bundle Underground (I) Method of Analysis. (地下におけるミュオン中間子束の研究 (I) 解析方法)
化学	森田 浩	Electronic Structures and Potential Energy Curves of Some Hydrogen-Bonded Systems. いくつかの水素結合系の電子構造とポテンシャルエネルギー曲線
地理学 {学位規則第3条 2項該当}	岡田 篤 正	中央構造線の第四紀断層運動 —とくに四国を中心として—
	新田 勅	熱帯地方における波動擾乱のエネルギー収支および構造に関する研究
	坂東 昭 次	放射化分析に関する研究
	佐藤 公 行	Studies on primary photochemical processes in photosynthesis. (光合成における初期光化学過程に関する研究)
同	長谷川 善 和	The Naumann' elephant, Palaeoloxodon naumanni (Makiyama) from the Late Pleistocene off Shakagahana, Shodoshima Is. in Seto Inland Sea, Japrn. 瀬戸内海小豆島の釈迦ヶ鼻沖合から産出した最新世後期のナウマン象
同	森本 治 樹	Statistical structure of the problem of sampling from finite populations. (有限母集団からの標本抽出問題の統計的構造)
物理学	太田 浩 一	超伝導核の質量非対称性
同	高橋 実	ベータ仮設の方法によるある種の一次元系の多体理論
同	坂井 典 佑	包含反応での軟パイ中間子定理と不連続公式
同	清水 韶 光	摂動論による核子の電磁形状因子

昭和47年3月29日修了

物理学	石川 章 夫	C_0F_2 の磁性と分光学的性質の理論
同	今竹 晃 子	ドナー励起スペクトルの濃度依存性
同	宇田 毅	グラファイトのサイクロトロン共鳴 —バンドの歪み, 空間分散, 多体効果の理論的研究—
同	岡田 勇	金属中の磁性不純物の局在 d -電子の基底状態
同	久保 健	二重交換相互作用の理論
同	住 斉	格子振動場におけるバンド状態と局在状態
同	高山 一	超伝導体における臨界現象の理論 —場の量子論によるアプローチ—
同	土井 高 夫	バンド端付近でのテルルの電子構造
同	永井 克 彦	液体ヘリウム中のロトンスペクトルの温度変化とロトン-ロトン相互作用について
同	福湯 章 夫	平面壁で囲まれた粘性流体中を運動する垂直平板による流れ
同	大矢 としえ	過塩素酸酸性凍結水溶液中の Fe^{3+} イオンの磁性

物理学	滝沢武男	二、三の半導体のピエゾ反射法による研究
同	福田礼次郎	非線型ラグランジアン
同	松本秀樹	二重共鳴模型の一般化について
同	渡辺正	非線型場の理論
同	鈴木宣之	軽い核における分子的構造と α 粒子巾
同	田中靖敏	球型核の電気双極振動状態
同	前田彦祐	ミラー磁場中のビーム・プラズマ放電における加熱過程
同	堀川弥太郎	原子核の変形と電子散乱
同	吉田肇	前方における陽子からの π^0 中間子の光発生
同	カルメン・ヒル	寿命測定による E2, E3 コマ偏極の研究
天文学	平林久	銀河バックグラウン輻射と銀河中の熱電子
地球物理学	須藤研	地震記録上の初動グループの中に含まれる、2つの特徴的な相から導き出された 1966 年 3 月 12 日の台湾沖地震の震源過程の研究
同	伊勢崎修弘	日本周辺の地磁気異常とテクトニクス
同	藤高和信	夜間電離層の力学的輸送効果
同	鈴木勝久	大気光 OI 6300 Å および OH 振動回転スペクトルの分光測光的研究
同	浜野洋三	格子力学の立場からみた酸化物の弾性的性質
同	上出洋介	電離層および磁気圏内電流による地球磁場擾乱の相互関係
同	長谷川洋作	差分法による SH 型振動の解 一有限円柱のねじれ振動と非均質媒質における Love 波一
同	林良一	大規模赤道波動の理論的研究
化学	小林孝嘉	分子性結晶および電荷移動錯体の励起状態の研究
同	福永迪雄	1, 3, 5-トリチアン-2-イル陰イオンの反応
同	高野哲雄	錯体における金属-金属結合の合成的研究
同	村江達士	ニガキの苦味物質
同	魏和洋	^{57}CO -錯体中に生成する ^{56}mFe の化学状態をメスバウアー分光法による研究
同	矢島文和	CO-59 核磁気共鳴によるコバルト錯体の溶液反応の研究
同	柏木寛	ナイトレンを中心とする不安定化学種の電子構造と反応性
同	宮崎章	岩石中の鉛の同位体組成とその地球化学的考察
同	堀靖郎	多環芳香族化合物の電導現象およびその機構
同	梅沢喜夫	ポーラログラフイーにおける磁場効果ならびに電極界面反応に関する研究
同	神原秀記	高速および低速電子線の弾性散乱断面積の測定による分子構造の研究
同	小林昭子	金属錯体の絶対配置と円偏光二色性の研究
同	土屋寛明	電荷移動錯体とイオンラジカル塩の精密な結晶構造解析
同	酒井ノブ子	イオンラジカル塩の物性およびその圧力効果
同	巻出義紘	無機ハロゲン化物のガスクロマトグラフイーにおける挙動
生物化学	牧野誠夫	タツナミガイ・ヘモシアニンの研究
同	吉田賢右	高温菌フォスフォフルクトキナーゼとフルクトースジフォスファターゼのアロステリックな性質
同	吉里勝利	オタマジャクシの尾ひれに対するプロラクチンの影響
同	柳尨夫	酵母リボソーム RNA の異種成分間の相互作用および高次構造
動物学	浅島誠	ウニ胚の発生過程における色素形成について
同	佐藤真彦	魚類嗅覚系の電気生理学的研究
同	浦野明央	視床下部神経分泌系の神経的な支配機構

動物学	町田武生	ラット卵巣における黄体形成の中枢による制御—特にストレス下での機構—
同	井内一郎	ニジマス <i>Salmo gairdnerii irideus</i> の発生過程におけるヘモグロビンと赤血の転換に関する研究
植物学	宇野功	<i>Coprinus Macrorbizus</i> における一核菌糸子実体の誘導に関する遺伝生化学的研究
鉱物学	山中高光	固溶体 ($Mn \times Fe_3 - \times O_4$) の陽イオン分布と局所的な歪み
同	高木俊系	PbS-Bi ₂ S ₃ 系結晶相の構造的関係
同	田賀井篤平	鱗珪石の熱転移と多型現象
相関理化学	中谷光久	アミノカルボン酸の三フッ化ホウ素付加物についての合成化学的研究
同	高橋義明	イオウを配置原子とする金属錯体の合成と性質について
同	川村越	ガラス器内で重合させた F-アクチンの長さとその調節
同	林清科	縮合燐酸塩のホットアトム化学—水溶液相並びガラス状における中性子捕獲の化学効果—
同	梶田晃示	Eu-カルコゲナイドの光伝導機構
同	佐藤幸紀	衝撃波法による CO ₂ -N ₂ , CO ₂ -CO 系での振動エネルギー移動に関する研究
同	渡辺公綱	円偏光二色性による RNA のコンホメーションの研究

改革問題について

かねてから改革室は改革フォーラム No. 23 に記載された改革試案に対する意見を求めていたが、理学部幹事会は次の意見を文書によって、改革室に提出した。

1972. 3. 24

改革室御中

理学部幹事会

改革試案 I・II に対する意見

理学部幹事会としては、東大の進むべき基本構想が明らかにならぬままにだされた改革試案 I・II に対して意見を述べることは差し控えたい。ただし、全般としての見地から東大改革に関して次のように考えているのでこの際述べておきたい。

1. 理学部は従来から研究活動に重点をおいて、自然科学研究の推進とそのなかで高度の専門研究者の養成を目ざして来たが、今後もこの目標を中心とし、そのための必要施策を一層強めていきたい。この点は理学部教官大多数の意志である。
2. 上に述べた点から、教養学部の改革を軸とした現在の改革の方向と予想される結果について危惧の念をいだている。理学部としては、大学院の体制が整備されることは緊急に必要と考えている。
3. 理学部では大多数の学生が大学院博士課程まで進学し、博士の学位取得者も多数にのぼっている。この意

味で現行制度で一貫教育を行なうことは、理学部においては9年間の教育課程を一つの教官団が責任をもつことにほぼ等しくなり、この点教育上その他に問題点が多いものと考えられる。

4. 現在伝えられるマスタープラン草案は研究教育にふさわしい環境の形成という観点から多くの危惧が感ぜられる。本郷キャンパスにさらに6,000人の学生とそれと見合う教職員を収容することについては賛成できない。

四教授御退官

宮本 梧 樓 教授

宮本梧樓先生は、明治44年8月17日愛知県において生れ、愛知県立熱田中学校、第8高等学校を経て、大正7年東京帝国大学理学部物理学科に入学、嵯峨根氏の指導を受けて原子核物理学の研究に従事された。昭和11年同大学物理学科を卒業、同年佐賀高等学校講師、同12年同大学物理学科を卒業、同年佐賀高等学校講師、同12年教授となられて後、同18年東京大学理学部講師、同19年理学博士、同20年同大学助教授を経て同30年教授となられた。その間理科学研究所、名古屋大学プラズマ研究所研究員を併任するかたわら、東京大学理学部物理学教室において34年の永きに亘り教育および研究に尽力された。

日本学術会議原子核特別委員として、戦後まもない沈滞していた我国の原子核物理学の復興に常に指導的役割



宮本 悟 榎 教授



木下 治 雄 教授

を果し、それは現在の高エネルギー研究所の実現につながるものである。一方昭和 33 年には、日本政府代表顧問としてジュネーブにおける第 2 回原子力平和利用国際会議に出席され、核融合装置として独自の考案を発表されたり、名古屋大学プラズマ研究所の設立に際しては多大の尽力をされ、我国のプラズマ、核融合研究の方向づけと発展につくされた行政的な功績も数多い。

原子核反応の研究ですぐれた業績をあげることによって始まった研究は、SOS の名で親しまれているベータ線分析器の発明を生み、その後完全集束質量分析器、プラズマ・ベータートロン、プラズマ・ライナック、電場併用等時性サイクロトロンなど全く独創的な装置を数多く手掛けられた。特に我国では最初で世界でも二番目に建設された強集束電子シンクロトロンは、日本の物理学史の記念碑として国立博物館に納められることになっている。

研究室では常に厳しかった先生も家庭では一女のよき父親である。

木 下 治 雄 教授

木下治雄先生は、明治 45 年 3 月 4 日大阪市に生まれ、大阪高等学校を経て、昭和 7 年東京帝国大学理学部動物学科に入学された。昭和 10 年動物学科卒業後大学

院に進学、鎌田武雄先生の下で動物生理学の研究を進められた。昭和 14 年理学部講師、同 22 年助教授、同 27 年教授となられ動物学第一講座を担当された。理学部での 33 年におよぶ在職期間を通じて、動物学科（後に生物学科）および大学院動物学専門課程での教育と研究とに尽力されたほか、昭和 42 年からは理学部附属臨海実験所長を併任され、また昭和 46 年 4 月以降東京大学評議員を勤めるなど学内行政の面でも貢献された。

先生は、運動生理学の先駆者として知られる大阪大学教授木下東作氏の御長男であられるが、幼年時代より、生物・無生物を問わず“動く”ものに強い関心を持たれていたとのことで、その御研究も動物界にみられる各種の運動に対する興味に貫かれている。初期の研究では、主として繊毛細胞、筋細胞、色素胞等を対象とし、一般生理学的立場からその興奮機構の解明につとめられ、多大の成果をあげられた。特にゾウリムシ等の原生動物繊毛虫類に対する電氣的、あるいは化学的の刺激の効果を精細に解析し、さらに細胞内微小電極法、顕微操作技術など、当時としては極めて斬新な研究方法を適用することによって、これら単細胞動物の示す繊毛反応が、原形質膜の電気生理学的な興奮現象と密接な関係にあることを立証した業績は、この分野における古典として国際的に高く評価されている。また、魚類色素胞における色素顆

粒の移動機構、原形質の収縮性、下等動物の神経系における興奮伝導機構等についても、独創的な研究によって多くの重要な発見をされた。最近では、比較的高等な動物の行動の生理学的解析を目指して研究を進められ、ヤドカリが自分の体に合った貝殻を如何にして選ぶかという問題や、ゴンズイという魚が示す顕著な群形成行動など、従来多くの学者の興味をひきながら、その機構が謎につつまれていた現象の本質を明らかにされつつある。

先生の御研究ぶりは、精力的そのもので、三崎の臨海実験所で実験をされる時には、午前4時頃から仕事を始められたり、毎日のように東京と三崎の間をドライブで往復されるなど、青年をしのぐお元気で、しかも実に楽しそうに、つぎつぎと新しいアイデアを出されては仕事を発展させて行かれる御姿は周囲の者に強い感銘を与えずにはおかない。

先生はお若い頃から水泳を得意とされ、特に背泳では旧制高校水泳界のナンバーワンであられた。最近でも三崎の海や本郷の室内プールで颯爽と泳いで居られるのをお見受けすることがある。また、非常に早くから映画撮影や自動車を愛好され、これを研究と趣味の両面で活用して来られたが、ここにも“動く”ものに対する終始變らぬ情熱が脈打っているように思われる。

鈴木 尚 教授

鈴木尚教授は明治45年3月24日生れ、東京高等学校から本学医学部医学科に入学、昭和11年3月卒業後ただちに解剖学教室に入り、副手・助手をへて、14年6月本学臨時医学専門部講師を嘱託された。理学部へは、長谷部、言人元教授の定年退官に伴う後任として、昭和18年4月に着任、はじめ専任講師として人類学講座を担当し、19年3月助教授、30年11月教授に昇進して、このたび定年を迎えられた。この間、昭和18年2月には医学博士の学位を授与され、19年3月より45年3月に至る26年余にわたり、人類学教室主任および大学院人類学専門課程主任を勤められた。

専門は形態人類学、なかんづく骨格に関する形態学を最も得意とされ、わが国の縄文時代、弥生時代、古墳時代をへて現代に至る日本人の骨格、特に頭骨形態の変遷を明らかにした業績は、その規模と内容において国内国外の学界で高く評価されている。この研究の一環として行われた、鎌倉材木座発見の数百体におよぶ人骨に関する研究は、それまで不明であった中世日本人の形質について全く新しい知見を加えた。また、芝増上寺徳川將軍墓の遺体を研究して、歴代將軍とその正側室の骨格形質



鈴木尚教授

の特徴を明らかにし、それらの特徴には將軍家の特殊な日常生活が顕著に反映していることを指摘された。

昭和36年には東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団を組織し、団長としてイスラエル国アムッド洞穴の発掘調査を指揮して、日本人としてはじめてネアンデルタール人骨の発見に成功、この人骨に関してはその後9年の歳月を費して詳細な研究をとげ、昭和45年協同研究者とともに本文439頁におよぶ英文報告書を出版された。この研究は人類進化の過程におけるネアンデルタール人の位置に関して、斬新な知見と考察を加えた点で世界の学界の注目するところとなっている。また、わが国の洪積世人類についても、従来確実な骨格標本は皆無といってよい状態であったところ、昭和32年東海地方の牛川・三月日、37年浜北の洪積世地層中より人骨を発見して学界の反響をよんだ。昭和43年および45年には、沖繩本島の石灰洞穴ならびにフィッシャー内堆積層の発掘調査を行い、それぞれ人骨が出土したが、その地層は伴出木炭片のC-14年代測定を本学の装置を用いて行ったところ、それぞれ 32100 ± 1000 年前および 18250 ± 650 年前という結果をえて、東亜における確実な洪積世人類の新資料を加えることとなった。

学外では、昭和35年より39年まで国際人類学民族学連合副会長、43年同連合第8回国際会議がわが国で

開催された際には総務幹事を勤め、以来同連合の幹事に推され今日に至っている。また、現在日本人類学会会長の職にあり、日本学術会議には第8期に引続き第9期会員に選ばれ、第4部副部長としてわが国の学術振興のため活躍されている。(渡辺直経)

高井冬二教授

明治44年12月15日東京生れ、府立高等学校を経て昭和10年東京帝国大学理学部地質学科を卒業、同年大学院に入学、徳永重康講師の指導で古脊椎動物学を専攻され、昭和12年副手、昭和14年助手を経て昭和22年に講師、昭和23年に助教授となられ、翌年には資源科学研究所所員を兼任、同じ年に中国中生代リコプテラ科魚類化石の研究で理博となられた。昭和30年以来教授として古生物学講座を担当された。助手に就任以来在



高井冬二教授

職34年の間研究と教育につくされ多くの研究者を育成された。また本学総合研究資料館設立にあたってはその設立委員会の幹事としてその建設に、また設立後は資料館幹事としてその運営に尽力された。一方、学外においては長年にわたり、日本古生物学会の常務委員としてまた昭和44年より二年間は会長として活躍され、現在も日本学術会議古生物学研究連絡委員会の委員長として国際学術交流に努力しておられる。

先生の研究は日本の古第三紀奇蹄類、および新生代の長鼻類の研究の基礎に始まり、これらとアジア各地産動物群との比較より、中生代以後現在に至るアジアの哺乳動物化石群やアジア中生代の淡水魚類の変遷史に進み、その成果は国際的に高く評価された。戦前は中国各地を踏査され、また戦後昭和31年には、東京大学イラク・イラン遺跡調査団の副団長として、イラク・イランを中心とする西アジア各地の洪積世哺乳動物群を調査された。昭和36年より、東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団の副団長として古生物を担当、現在までに4次にわたる西アジア各地の調査を指導された。この調査団が昭和36年および39年におこなったイスラエル・アムッド洞くつの発掘では、ネアンデルタール人類遺体に伴って発見された哺乳類化石を研究、同人類の時代の判定と当時の自然環境の復元に努力された。また、昭和42年、45年に行われたレバノン・シリア地域の調査で得られた資料の研究に取り組んでおられる。

先生は学生の研究方向に対して寛大で、いろいろな研究分野での研究者を育てられ、また学生より新しく出されるアイデアをよく採用されて学生の研究を援助してこられた。そして御自身は、戦前は中国大陸を、また戦後は中近東を研究材料を求めて歩き廻られた。ベレー帽をかぶって、あごを少し前に出し独特の歩調で野外を歩く先生の姿は、先生と同行した者にはわすれがたい印象である。

編集 和田昭允
理・1号館 217号室 内線 2298